

WHY WE FOCUS ON RESPONSIBLE INVESTMENT

三菱UFJ信託銀行の考える責任投資

三菱UFJ信託銀行は、日本における責任投資のパイオニアとして、様々なアクションを起こしてきました。

しかし私たちは、決して現状に満足していません。

その理由は、社会における責任投資の果たすべき役割が一層増しているからであり、

パイオニアとして実践を重ねてきたからこそ見えてきた、乗り越えるべき課題があるからです。

ここでは、三菱UFJ信託銀行が責任投資を重視する背景や、私たちの強み、目指す姿をお伝えしていきます。

8 責任投資の潮流

10 責任投資の現状と課題

アセットマネジメント事業長インタビュー

16 三菱UFJ信託銀行の特色と強み

20 三菱UFJ信託銀行の目指す姿



責任投資は 「実践」と「成果」の時代へ

責任投資の考え方は古くから存在していましたが、その重要性は大きく拡大しています。

責任投資は、今、どのように「実践」し、
いかに「成果」を生み出していくかが問われるようになっています。

1920年頃～

2006年頃～

社会的責任投資(SRI)

Socially Responsible Investmentの略。
財務情報だけでなく、企業が社会的責任(CSR)を
果たしているか考慮

通常の投資

財務情報を中心とした投資判断。
経済的な投資リターンを追求

投資を取り巻く潮流を概観してみると、経済的な投資リターンの獲得のみならず、世界における様々な課題を、投資を通じて解決しようとする大きな流れが存在していることがわかります。

1920年代、アメリカにおいて、武器、ギャンブル、タバコ、アルコールなどに関わる企業を、投資対象から除外する動きが起こりました。これが社会的責任投資(SRI)の始まりであると言われています。1980年代以降になると、深刻さを増す環境問題への対応が強く叫ばれるようになり、日本も含め世界各地で、環境に配慮した企業に対し、積極的にSRIが行われるようになりました。

2006年に国連主導で発足した責任投資原則(PRI)^{*}は、こ

のような流れを、大きく発展させる土台となります。投資において考慮すべき非財務の視点を、環境(E: Environment)、社会(S: Social)、ガバナンス(G: Governance)の3つに整理し、投資判断やアクティブ・オーナーシップに組み込むべきであることを明文化したのです。以後、多くの投資家がこれに賛同し、PRIへの署名機関数は、これまでに5,000超(2022年6月末)にまで拡大しています。世界のESGに関連する規制も年々増加しており、近年は投資家を対象とした気候変動問題への対応の強化を求める規制なども増加。責任投資を後押しするグローバルなESGイニシアティブも、次々と発足していきました。2015年には、国連サミットで持続可能な開発目標(SDGs)が策定され、政府、企業、個

近年

インパクト投資

投資主体がインパクト創出の「意図」を有している投資

目的

投資リスク・リターン向上
+
環境・社会への意図した
インパクトの創出

影響

グローバルでインパクト創出に
向けた様々な取組みが進行中

課題

投資リスク・リターンの向上と
意図するインパクトの追求

責任投資

PRI (Principles for
Responsible Investment) が定義。
ESG を考慮

目的

ESG の考慮により、投資リスク・リターン向上

影響

考慮すべき非財務の視点として
「E」「S」「G」が定義され、世界的に広く普及

課題

より幅広い運用資産における ESG の考慮と
その取組みの深化

目的

倫理観の実現 + 投資リターンの追求

影響

1990年代以降広まり、倫理観を重視した投資の
概念が広まる

課題

倫理観と投資リターンの関係性

目的

投資リターンの追求

影響

個人投資家にまで広く定着。長く資本市場を活性化

課題

長期的・安定的な投資リターンの向上による資本市場へのさらなる貢献

人などが今まで以上に ESG を意識し、持続可能な社会に結びつく取組みを推進する追い風となりました。幅広く持続可能性を意識した活動が求められる中、投資家にとっては、ESG を考慮した責任投資の推進が持続可能な社会への貢献に結びつき、その結果として、投資先の持続可能な成長の支援、経済的な投資リターンの向上に繋がっていくと考えられます。

そして、近年は、インパクト投資が注目を集めています。社会が直面する課題がより深刻化、複雑化する中で、その解決は政府や個人による活動のみでは担い切れないことが明らかとなり、「成長（経済的な投資リターン）をもたらすと共に、環境・社会への成果（ポジティブなインパクト）も同時

に生み出すことを意図した投資」が登場したのです。

このように、今、投資家には、責任投資を着実に「実践」することももちろん、投資先がどのような「成果」を生み出すかを意識することも重要になりつつあります。なぜなら、環境・社会の課題解決に貢献して「成果」を出していくことは、投資先の持続的な「成長」、さらには経済的な投資リターンの向上に繋がっていくと考えられるからです。責任投資の果たすべき役割は、かつてなく大きくなっているのです。

※ 責任投資原則（PRI：Principles for Responsible Investment）とは、2006年当時の国連事務総長であるコフィー・アナン氏の提唱により策定された行動原則。持続可能な社会の実現を後押しするために、ESG（環境：Environment、社会：Social、企業統治：Governance）課題を投資の意思決定プロセスに組み込むことなどが示されています。

責任投資の「成果」のためになすべきこととは？

「成果」が重視されるようになった責任投資。しかし、そこにはまだ多くの課題があります。責任投資の現状と課題、そして三菱UFJ信託銀行にできることとは何か、アセットマネジメント事業長の川上豊がお伝えします。



“ 運用資産残高
100兆ドルの行く末が、
地球の未来を変えるのです ”

常務執行役員
受託財産副部門長・
アセットマネジメント事業長

川上 豊

1990年入社。海外アセットマネジメント事業部などを経て、2019年よりFirst Sentier Investors（欧州を中心にグローバルで長年にわたり責任投資に取り組む、三菱UFJ信託銀行傘下の運用機関。オーストラリア本社。以下、FSI）副社長。2022年4月より現職

Q. そもそも「責任投資」とは何か、改めて教えてください。

——中長期視点の投資をESGの枠組みで捉え直したものだと思っています。

まず「投資」とは、自分が提供した金額よりも、大きな金額が返ってくることを期待して行うものです。「責任投資」もこの点は全く同じであり、異なるのは、投資に対する姿勢です。「投資」の中には、大きなリターンさえあれば、投資先のことは気にしないという姿勢もあるでしょう。一方「責任投資」は、投資先が環境(E: Environment)、社会(S: Social)、ガバナンス(G: Governance)といった領域で問題を孕んでいないか、逆に優れた取り組みを行って事業に活かしているかも考慮します。責任投資だからといって特別なタスクがあるわけではなく、従来の年金運用など同様に、様々な機会とリスクを熟慮した運用を行います。つまり責任投資は、中長期視点の投資を、ESGの枠組みで捉え直し、発展させていく取り組みと言えるでしょう。

責任投資の考え方は、日本では近江商人の「三方よし」と似ています。売り手と買い手に加え、社会が喜ばなければ事業は長続きしないという考え方は、決して目新しいものではありません。

Q. 川上さん自身が責任投資の重要性を認識したきっかけがあれば教えてください。

——オーストラリアで、環境問題の深刻さを肌で感じました。

日本で運用の事業に携わっていたときから、責任投資の重要性は理解していたつもりでしたが、その認識をより強いものとしたのは、オーストラリアでの経験です。

日本でも報道されていたかと思いますが、FSI着任後まもなく、オーストラリア史上最悪と言われる森林火災が発生しました。北海道の1.3倍ほどの面積の森林を焼き尽くし、オーストラリア固有種であるコアラだけでも8,000頭が死んでしまったと言われています。生態系に取り返しのつかないダメージを与えたことは言うまでもありません。原因は、気温上昇及び雨不足。気候変動が与える恐ろしい影響を痛

感させられた出来事でした。

さらにその後は、世界的な新型コロナウイルスの感染拡大が発生。長年にわたり責任投資に取り組むFSIの仲間はこれを自分ごととして考え、良き企業市民として何ができるのかを真剣に議論していました。待った無しの社会課題が今、目の前にあり、投資家は自分たちにできることを真剣に考え、行動しなければならない。そう強く認識したのです。

Q. なぜ社会課題の解決のために“投資”が重要視されているのか教えてください。

——社会を変え得る、巨額の運用資産があるからです。

突然ですが、世界のGDPの合計は約100兆ドル(1京円)です。世界の株式の時価総額の合計も、約100兆ドルです。では、世界の運用資産残高の合計はというと、実はこれも、約100兆ドルなのです。この100兆ドルが、どこにどのように流れていくか。それによって世界が環境・社会の課題解決に向かうのか、それとも逆行してしまうのか、その行く末が決まると言っても過言ではありません。

かつて「企業は株主のもの」という考え方が主流の時代もありましたが、100兆ドルがもし、株主の利益だけを目的として配分されたら、社会課題の解決は難しくなります。代わりに、企業を取り巻く全てのステークホルダーの豊かさを追求して配分されれば、解決に近付けるはず。このような背景から、国連をはじめとしたグローバル機関や非営利組織など、世界の様々なステークホルダーから、投資家に対する期待と要望が高まっているのです。

Q. そうは言っても投資に一番に期待するのは、より多くのリターンです。

——リターンを重視するからこそ、責任投資が必要です。

人がお金を預けるときに一番に望むのは「資金を増やしてほしい」ということでしょう。「社会課題を解決してほしい」ではありません。当たり前のことであり、私自身も生活者の立場に立てば同意見です。しかし、だからこそ、責任投資を行うべきなのです。

“ 環境・社会の課題は、 今、企業が成長するための前提を揺るがしている ”

その理由は第一に、社会課題は、企業が成長するための前提を揺るがすものだからです。異常気象による災害が頻発したり、働き手が過酷な労働を強いられていたり、企業に偽装などの不祥事が起きたら、長期・安定的なリターンを生むことはできません。

第二に、社会課題の解決に取り組む企業には、大きな成長の可能性があるからです。海洋プラスチックの問題を例に挙げてみましょう。三菱UFJ信託銀行とFSIが共同で設立したMUFG ファースト・センティア サステナブル投資研究所の調査では、マイクロプラスチックと呼ばれる微小なプラスチックが、毎年80～250万トンも海洋に流入していると言われています。これが海洋生物の生態系を脅かし、食物連鎖を通じて人体にも入り込み、健康被害を引き起こす可能性が指摘されています。その原因の一つとされているのが、

日々の洗濯の際に衣類から出るマイクロファイバー（人間の髪の毛の直径約5分の1に過ぎない微細繊維）です。もし、洗濯機に容易に装着できる濾過装置が普及すれば、企業の成長と社会課題の解決を、同時に叶えることができるのです。

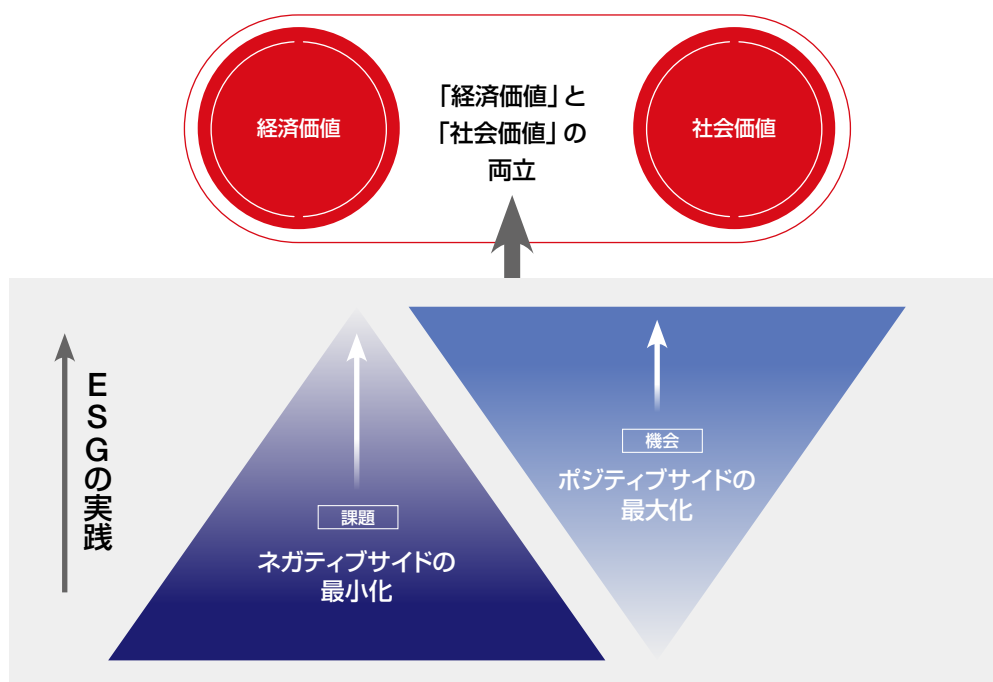
課題は多くありますが、社会課題を解決しながら、経済成長を実現していくことは十分に可能であり、今後はそのようなビジネスに多くの資金が集まるべきです。

Q. 責任投資の課題はどこにあるのでしょうか？

——正しい理解を広げ、トレードオフの関係を乗り越える必要があります。

第一に、責任投資が正しく理解されていない点です。責任投資は長期・安定的なリターン獲得に不可欠ですが、ま

ESGは「課題」であると同時に、
「機会」である





“ これら「課題」への確たる「解」はまだない。
大きな試練が突きつけられています ”

だそう感じていない投資家も多いと考えています。さらに「グリーンウォッシング」のように、実態が伴っていないのに、「サステナブル」や「SDGs」を謳ってビジネスを拡大しようとする企業が一部存在することにより、ESGに懐疑的な目を向けてしまっている投資家がいるという面もあるでしょう。

第二に、社会課題の解決は、こちらを立てればあちらが立たず、というトレードオフの関係に陥るケースがある点です。例えば、ソーラーパネル設置のために森林を伐採した結果、地滑りが起きて近隣住民が被害を受けるかもしれません。風力発電機や電気自動車は、鉱物採掘に依存しているため、生物多様性への悪影響が懸念されるとも言われます。企業が創意工夫をしても、結果的に「別の何か」を犠牲にしよう可能性があるのです。

「問題」は明らかに存在しているけれど、確たる「解」はまだありません。しかし、今、行動しなければ状況は悪化の一

途を辿るだけです。そのような中、機関投資家には何ができるのか、大きな試練が突きつけられているのです。

**Q. 三菱UFJ信託銀行が責任投資にかける
思いを教えてください。**

——責任投資は、私たちが目指す姿を
実現していくための手段です。

現在、私たちは、グループ全体で約100兆円の運用資産をお預かりしています。日本のGDPや株式時価総額の2割近くを占めます。これだけの規模があれば、私たちがどこに資金を配分するのか、投資先にどのように働きかけるかによって、社会を少しずつ良い方向に前進させられるはずですよ。

三菱UFJフィナンシャル・グループは、「世界が進むチカラになる。」というパーパスを、三菱UFJ信託銀行は「安心・豊かな社会」の実現を掲げています。どちらも、事業を通じ



“ 100兆円の規模と実績を活かし、 責任投資市場を牽引したい ”

てより良い社会の構築に寄与したいという意志が込められています。同時に私たちには、受託者としてお客さまや社会からの期待と信頼に応える“フィデューシャリー・デューティー”のDNAがあります。これらの思いを形にする手段こそ、責任投資です。それ故に私たちは、日本でいち早く議決権行使を開始し、責任投資原則(PRI)に署名するなど、行動を起こしてきました。これからも日本における責任投資のパイオニアとして、責任投資市場を牽引する存在でありたいと考えています。

Q. パイオニアとして責任投資市場を牽引するために、三菱UFJ信託銀行が活かせる強みは何でしょう？

——これまでに積み重ねてきた歩み一つひとつが強みであり、パイオニアとして一層強化すべき課題でもあります。

私たちは責任投資の考え方に共感し、実践のための創意

工夫を、会社を挙げて行ってきました。その実績一つひとつが、現在、私たちが業界でリーダーシップを発揮する上での強みとなって蓄積されていると考えています。

その強みは大きく分けると、運用、基盤強化、調査・研究となりますが、中でも基盤強化や調査・研究に力を入れているのは当社の特色と言えるでしょう。

基盤強化では、責任投資を自分たちの言葉に置き換えて、「MUFG AM 責任投資ポリシー」を策定しました。どのESGを考慮すべきか、「重大なESG課題」を特定するプロセスでは三菱UFJ信託銀行と傘下の運用機関が一体となって議論と改善を重ねると共に、責任投資においてもしっかりとPDCA(Plan-Do-Check-Act)サイクルを回していくためのガバナンスの体制を構築しています。[詳細は24ページへ→](#)

調査・研究では、三菱UFJトラスト投資工学研究所などからの調査・研究成果の発信に加え、MUFG ファースト・センティア サステナブル投資研究所を通じて、責任投資に関する様々な疑問に答えるリサーチ情報を世界に向けて発

“ 情報発信を強化し、 責任投資の裾野を広げていく ”

信しています。

[詳細は32ページへ→](#)

運用においては、株式・債券のみならず、不動産なども含めた運用資産において、責任投資を行っています。インテグレーション、エンゲージメント、議決権行使といった投資家としてできる手法の全てを最大限活かし、経済価値と社会価値の両立を目指しています。

[詳細は60ページへ→](#)

一方で、強みは同時に、これからの課題であるとも言えます。なぜなら、社会問題の解決に確たる「解」がまだ無いように、機関投資家としてのあるべき姿にも確たる「解」は無いからです。私たちは、自らを進化させるための努力を、惜しまずに続けていきます。

Q. 具体的には、どのようなことを実践していくのですか？

——KPIを用いた自身の評価、
丁寧な情報発信に注力していきます。

なすべきことは数多くありますが、特に力を入れていきたいと考えている取組みを2つお伝えします。

第一に、言行一致の追求です。企業に対してESGに取り組ましよう、と言っている投資家自身がESGを実践していなければ、説得力は無いでしょう。これまでも役職員を対象としたESG勉強会を実施し、知見の向上と取組みの推進に努めてきましたが、2022年からは、社長の長島が巻頭のご挨拶で申し上げている通り、三菱UFJ信託銀行の事業運営の方法も改革しました。従来のビジネス上のKPIに加え、当社の経営に社会へのインパクトの視点を採り入れ、「ビジネスを通じて社会にどれくらい貢献したか」を評価する社会的インパクトの視点からのKPIを導入しています。トライアンドエラーの段階ではありますが、良き先例となりたいと考えています。

[詳細は118ページへ→](#)

第二に、情報を伝える量と質の向上です。前述の通り、責

任投資は日本だけでなく世界でもまだ十分に理解されていません。その原因の一つが、取組みや成果が抽象的であったり複雑であったりして、分かりづらい点です。定量的な説明が難しい場合は、定性的な説明も用いて丁寧に伝え、理解を進める一助になりたいと考えています。その一例が本報告書であり、当社の考え方や実際の取組み、成果をできる限り分かりやすくお伝えできるよう努めました。さらに今後も、MUFG ファースト・センティア サステナブル投資研究所において中立的かつ実践的なリサーチを続けていき、今まで以上に、責任投資の理解のお役に立つ情報を日本、そして世界に発信していきます。

社会課題の解決は、アセットオーナーや投資先、規制当局など様々なステークホルダーと共に取り組むことで加速します。質量共に優れた情報発信を通じて、責任投資の裾野を広げていきたいと考えています。

Q. 今後に向けた意気込みをお願いします。

——本当の「安心」と「豊かさ」のために
「解」を探し続けます。

環境・社会の課題は、複雑かつ深刻です。日本ではあまり話題になりませんが、過酷な環境で労働を強いられる現代奴隷が、世界に約4,000万人もいると言われています。エアコンの効いたオフィスビルの中にいて、このような問題を他人ごとと思うことは簡単ですが、私たちはそうはなりたくないのです。私たちには、将来の豊かさを願ってお客さまが託してくださった、100兆円の資産があります。本当の「安心」のために。本当の「豊かさ」のために。この目指す姿を実現していくための、確たる「解」はまだありません。だからこそ諦めず、立ち止まらず、挑み続けていきます。

運用は ESGの視点も考慮

三菱UFJ信託銀行の運用する資産は、ESGの視点を組み込み、非財務情報も活用した投資先との対話や投資判断、情報開示などを行っています。これは「MUFG AM 責任投資ポリシー」として明文化されており、業界の先駆けとも言える取り組みです。

[詳細は24ページへ→](#)



日本における責任投資

三菱UFJ信託銀行の特色と強み

組織づくり
責任投資にコミットする

お客さまからお預かりした大切な運用資産において、成果のある責任投資を行うためには、その土壌となる組織づくりが必要です。株式はもちろん、不動産、外部委託運用においても、責任投資を推進する会議体を設置。管理・監督は、取締役会・経営会議の直下で行っています。

[詳細は30ページへ→](#)



多種多様な課題に無作為に取り組んでいては、着実な成果は見込めません。「重大なESG課題」の特定を行うことはもちろん、より客観的に重要度を評価する手法の開発にも力を入れている点が三菱UFJ信託銀行の特色です。

[詳細は26ページへ→](#)

「今真っ先に
挑むべき課題」は何か、
問い続ける

のパイオニアとして

私たちは創業以来、お客さまからお預かりした大切な運用資産を長期・安定的に拡大していく“フィデューシャリー・デューティー”のDNAを胸に、「安心・豊かな社会」の実現を目指してきました。投資を通じて社会課題を解決しようとする責任投資はまさに、私たちが目指す姿を実現するための手段です。変わらぬ理念と、それに基づくトライアンドエラーを繰り返してきた三菱UFJ信託銀行だからこそ、日本における責任投資のパイオニアとして、道を切り拓けると自負しています。

グローバルな知見との シナジーを、 最大限に活かす

責任投資のグローバルな知見を有するFirst Sentier Investors(以下、FSI)を買収し、協働エンゲージメントや調査・研究に共に取り組んでいます。責任投資においてリーダーシップを発揮するFSIのグローバルな知見と、日本最大級の運用機関である三菱UFJ信託銀行の実績を掛け合わせ、責任投資の発展に貢献していきたいと考えています。

[詳細は32ページへ→](#)

長年にわたる 責任投資への取り組み

三菱UFJ信託銀行は、責任投資に関するイニシアティブへの参画、責任投資を実行するための社内の体制整備など、業界に先駆けて行動を起こしてきました。三菱UFJ信託銀行の責任投資への取り組みをダイジェストでお伝えします。

COMMITMENT

責任投資に対するコミットメント

信託銀行としての 責任投資のDNA “Fiduciary Duty”

相手方から信頼を託され、その相手方のために専門性の高いサービスを提供する人をFiduciary(フィデューシャリー：受託者)といいます。フィデューシャリー・デューティー(受託者責任)とは、フィデューシャリーが、お客さまの利益を最優先とした業務運営を行う義務を負うことを意味します。私たち三菱UFJ信託銀行は、フィデューシャリーとして、様々な法的義務を果たすことはもとより、高い倫理観と専門性に基づいて行動することで、お客さまや社会からの期待と信頼に応えていけるよう努力し続けています。

1999

業界に先駆けて
議決権行使を開始
投資先との「対話」の始まり

2014

スチュワードシップ・
コードの受け入れ開始

[詳細は78ページへ→](#)

2002

議決権行使の
専門部署を設置

2017

スチュワードシップ委員会
新設

2006

発足と同時に PRI に署名
同年「責任投資セミナー2006」を
UNEP FIと共同開催、責任投資の
概念を社内外に発信



2006年5月2日、
英国雇用年金省
政務次官 (Plaskitt 氏)
がPRI署名式典(ロンドン)
に参加
写真提供 UNEP FI

INNOVATION

投資戦略におけるイノベーション

2006

国内株式 SRI ファンドの
運用開始

2011

「サステナブル
成長銘柄投資型ファンド」の
運用開始

Our Performance

データで見る責任投資の実績



エンゲージメント
件数

(2021年7月～2022年6月)

約 1,240 件

2019

責任投資推進室を設置

責任投資の推進体制を構築

詳細は31ページへ→

アセットマネージャー
としてTCFDに賛同、
TCFDコンソーシアムに
参加

「MUFG AM 責任投資ポリシー」策定

お客さまからお預かりした
運用資産における
ESG考慮を明文化

詳細は24ページへ→

2020

責任投資ポリシー改定

「重大なESG課題」 特定プロセスを高度化

国内運用機関で初めて
マテリアリティ・マトリクスを採用

詳細は26ページへ→

ガバナンス体制を強化

経営会議・取締役会への
付議・報告の体制を構築

詳細は30ページへ→

2021

Asia Asset Management Best ESG Manager in Japan 受賞

21世紀金融行動原則 「2020年度 環境大臣賞 (総合部門)」受賞



ESG効果分析を拡充

三菱UFJトラスト投資工学研究所の
知見を活かし「成果」を可視化

詳細は108ページへ→

2021

MUFG ファースト・センティア サステナブル投資研究所 設立

中立的で実践的な
リサーチへのニーズに応える

詳細は32ページへ→

NZAM (Net Zero Asset Managers initiative) にMUFG傘下の資産運用会社と 共に同時参画

2022

環境省モデル事業 国内株式インパクト投資 ファンド選定

国際的フレームワークに合う
測定・管理方法の実践などが評価

社会的インパクトKPIの 導入

自社が社会に与える非財務的価値を
可視化

2015

欧州指数開発大手 STOXX社と業務提携

※ STOXX社は2019年9月、親会社のドイツ取引所 (Deutsche Börse Group) が米国リスク分析モデル提供会社の Axioma社を買収し、設立した Qontigo社の一部となりました

2017

「グリーンボンド」への投資開始

2018

信託銀行として初めてGRESB リアルエステイト評価へ参加 不動産運用におけるESG活動強化

詳細は70ページへ→

2020

外部提携ベイリーギフォード社の インパクト投資ファンド設定

iSTOXX MUTBJAPAN 女性活躍30インデックス開発

2022

iSTOXX MUTB JAPAN プラチナ キャリア150 インデックス開発



議決権行使議案
行使件数

(2021年7月～2022年6月総会)

23,922 件※



責任投資に関わる
専任担当者数

(兼務込み35名※) (2022年6月末)

16 名



平均経験
年数

(2022年6月末)

13 年



責任投資に関わる
役職員数

(2022年6月末)

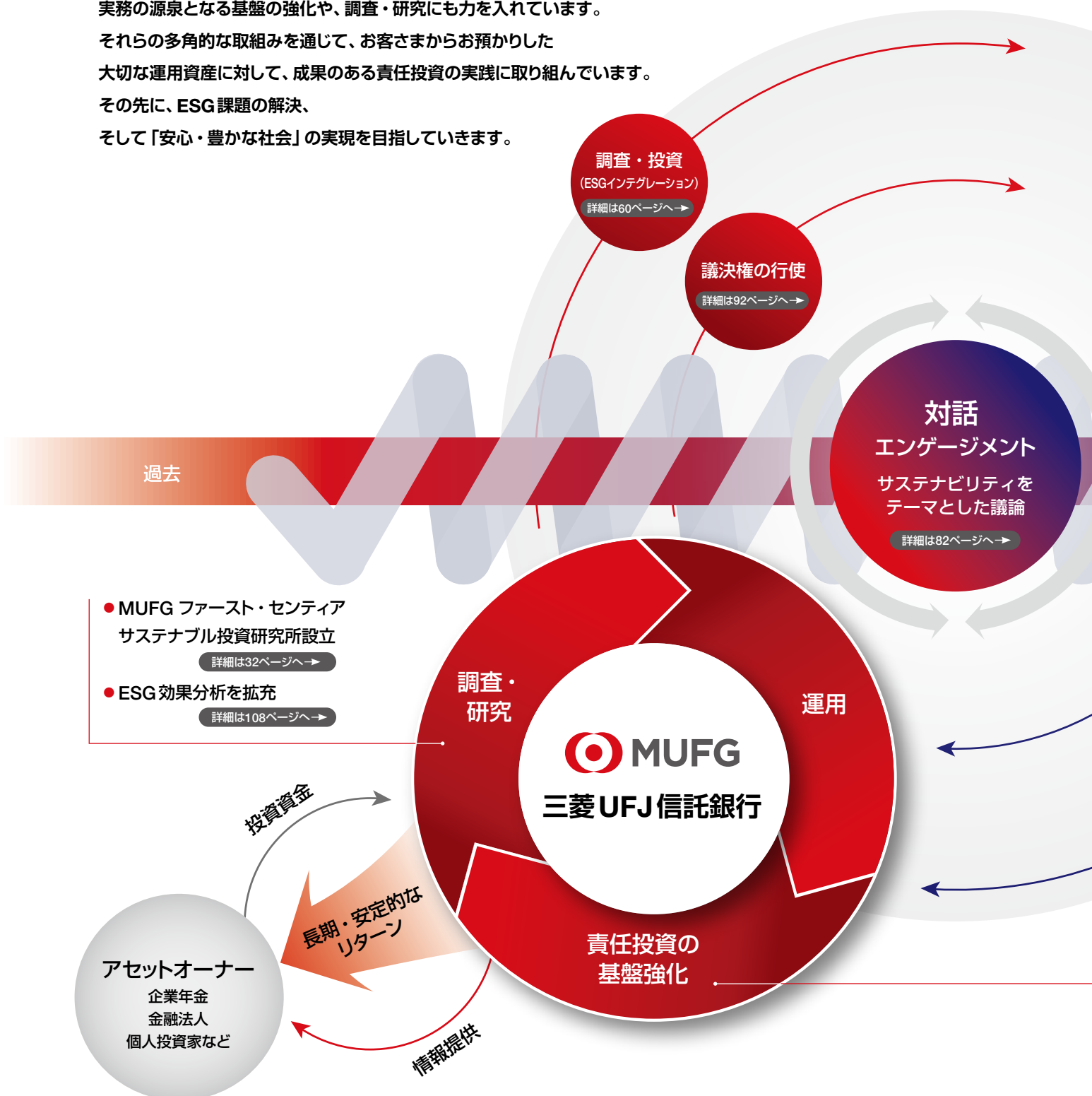
614 名

※ 国内株式の議案数が対象

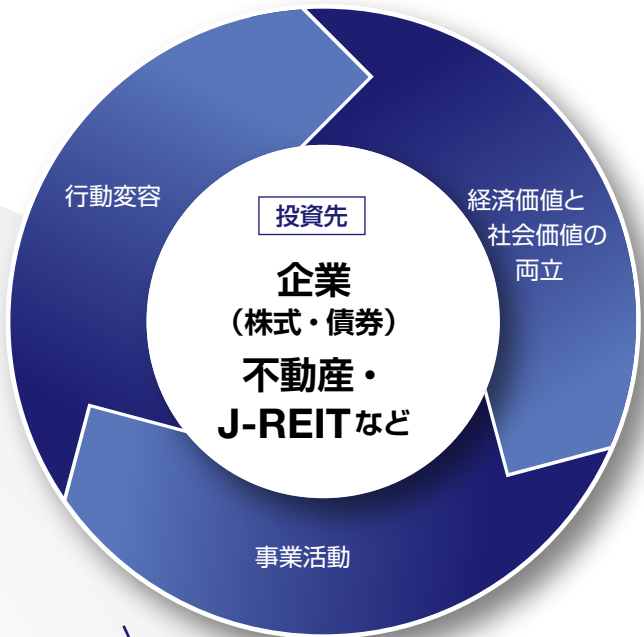
※ 「MUFG AM 責任投資ポリシー」で運用プロセスにESGを組み込む方針を打ち出す中、同方針推進に向けて、各運用資産で兼務者を任命

運用機関として行える、全ての手段を用いて 「安心・豊かな社会」の実現を目指す

三菱UFJ信託銀行は、運用の実務を通じた責任投資の実践のみならず、
実務の源泉となる基盤の強化や、調査・研究にも力を入れています。
それらの多角的な取組みを通じて、お客さまからお預かりした
大切な運用資産に対して、成果のある責任投資の実践に取り組んでいます。
その先に、ESG課題の解決、
そして「安心・豊かな社会」の実現を目指していきます。



重大な ESG 課題



未来

投資リターン

財務・非財務
情報の開示

- 「MUFG AM 責任投資ポリシー」の策定
詳細は24ページへ→
- 「重大な ESG 課題」の特定と見直し
詳細は26ページへ→
- ガバナンス体制への組み込み
詳細は30ページへ→
- 役職員のリテラシーの向上
詳細は112ページへ→
- ESGイニシアティブへの対応
詳細は115ページへ→
- 社会的インパクトKPIの導入
詳細は118ページへ→



三菱UFJ信託銀行のVision
「安心・豊かな社会」の
実現へ